(一) 第738号 昭和27年9月25日 第三種郵便物認可 THE MIIKE (毎月1・16日発行) 昭和38年(1963)9月1日 (日)

発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話 3033 8100 番
編集兼発行人 澁田紀生

第三次合理化、組合ぶっつぶしの責任追及撤回を!!地域共斗の推進を!!全組合員・家族が団結してたたかい抜こう!!

たくましく斗いに生きる主婦と育つ子ら

(8月23日の抗議行動で)

家族ぐるみのたたかい

宮浦・高椋さん一家をたずねて

たたかいはいよいよ長く、粘り強いものとなってきた。われわれのたたかいは家族ぐるみの体制がガッチリ固まらねば勝利はない。今回は宮浦支部の高椋さん一家をたずねて、家族ぐるみのたたかいの様子を語ってもらった。

高椋さんの一家は

乙松さん(お父さん) 号は竜生
よしのさん(お母さん) 事務員
龍子さん(長女一八才) 高校三年
淑子さん(次女一五才) 中学三年
力くん(長男一二才) 中学一年

みんなが協力

口にはいう労使は親子関係と落盤に足うしなえば首切らる
分割の給料と棚上げのボーナスありて食しき盆の仏をまつる
落盤につぎつぎ枠木折るる日よ差別より苦しきものなしと思いし日
就業以来四十人の犠牲者を出したる炭鉱(やま)にかじりつき生く
雷雨中とびこんで来し集金婦うら若く炭鉱離転者の妻
大雨に濡れて仂らきし妻の作業衣脱ぐを待ちて洗いぬ

(高椋さんの最近の作品より)

お母さんのよしのさんは二年ほど前から内職に出るようになった最初はつけもの屋に行っていたがあまり給料が安いので、現在の事務連絡の仕事についた。お父さんの高椋さんは宮浦鉱勤務(常一番)長女の竜子さん、次女の淑子さんはそれぞれ来春の大学進学、高校進学をめざして勉強中、長男の力君は中学一年生。

「皆の協力がなければ、私のように四十台になってはじめて仕事に出るということはできません。家庭の主婦が、いくらなんでも月に二七日、二八日も仕事に出るということはとてもむつかしいことです。三池主婦会が責任感があるということは家庭全体の協力があるからでしょう。家でも不服をいいながらも皆が協力してくれます。残業でもあれば夕食の用意から朝の米までといでくれるという家族の協力が私の仕事を支えてくれているといえます」(よしのさん)

高椋さんの家では竜子さんと淑子さんが当番で食事の用意をすることになっている。お父さんの高椋さんも、洗たくやそうじなど、こまかな気をくばっている。

「お母さんが二人になったようなところが三池斗争を通じて夫妻や組合と主婦会、地域や組織全体が本当につながってきたということがいえるのと同じことだと思います。また、そうならないと本当の苦しい長い斗いはできないのでしょう」(高椋さん)

たたかいの中で理解は深まる

家族全部がすいじを当番することから、家庭の経済事情を全部知り合い、その結果お母さんの内職やむだづかいをしないことなどを自分のこととして感じたということのほか、家族全部がピッタリと気持がつながってきたといえよう

「妻が仕事に出て、その後の家庭を支えるのは自分と子供たちなのですから、全体の協力で家庭という輪を円滑にすることができます。家庭の仕事をしてみてはじめて、妻の仕事の重要さとむずかしさを知ったし、自分の仕事のつかれを通じて妻の苦しさを知ることができます。そうすれば自分からすすんで家庭の仕事をしようという気になってきました。お父さんがお母さんのようになったと子供たちがいいますが、共かせぎの家はどこでもそうなのではないでしょうか。妻が職場に出てくれてかえって、気持がピッタリつながるようになったといえます。そのようなことをするのは、夫妻や組合と主婦会、地域や組織全体が本当につながってきたということがいえるのと同じことだと思います。

なんでも話し合う

しかし、竜子さんは来春が大学受験、淑子さんは高校受験をひかえて、それぞれすこしの時間も惜しい時期なので、いくら理くつではわかっていても「食事の用意をしなくていいのなら」と思うときがある。また、お母さんも時間的にも体力的にもぎりぎりのときはついつらく当ることがあるが、そのようなときはかならず話し合うことにしている。「腹が立ってガチャガチャなったときでも、話し合えばやっぱりうまくいく。話し合えば必ず落ちつくということは親子が信じ合っている証拠でしょう」(よしのさん)また、家族全部が三池のたたかいの意義を話し合い、理解しあっているということが、その根底にある。

「斗争が終るまで、こんな低賃金になるとは想像もつきませんでした。今でも一家五人がただ食べるだけなら、なんとかできるでしょうが、子供たちの学校の費用まで考えるにはどうしても、私が仕事に出なくてはならない。なんとかしてこの苦しい状態を切抜けるには、皆が協力しなければならないということを、皆の話し合いの中で理解しています。子供たちも斗争本部の前で育った三池の子供らしくそのことは理解してくれます」(よしのさん)このほか、皆の仕事が早く終ったときなどほ、少し晩酌が入ったお父さんの周囲に集まって、合理化のはなしや、不当な責任追及のこと、第二組合のことや、お母さんのつとめさきのはなし、三池労組の同志的団結の様子などについて話し合うことがある。

毎日の生活が資本とのたたかい

「組合が分裂して力が弱まるとこんなに苦しい生活をせねばならなくなるので、ほんとに分裂などがなかったらなと思います。子供でもわかることが、やとなのひとが、わたしたちをうら切って会社に協力するようなことをするのは、わかりません」(竜子さん)

「毎日の生活を通じて、子供は子供なりに親の〃抵抗のたたかい〃を実感として感じとってゆくということが一番大切だと思います。たしかにいまは苦しいが、この苦しさを通じて、本当に人間らしい人間作り上げてゆくということが教育の基本であり、労仂運動の基本であると思います。子供たちの将来に必ずプラスになると思います。『苦労する身はいとわねど苦労しがいのあるように』という歌の文句ではないが、われわれのたたかいが勝った負けたではなく、われわれのたたかいが正しいかどうかということが問題で、それを歴史の中で認めさせるということが、われわれの斗いの本当の目的だと思います」(高椋さん)

われわれの日々のたたかいで、われわれとわれわれは家族全体をますます労仂者らしく、人間らしく成長させねばならない。

「お母さんが二人になったような気がする」(淑子さん)ほどの協力ぶり。